

Title	宋拓薛氏款識
Sub Title	
Author	西川, 寧(Nishikawa, Yasushi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1932
Jtitle	史学 Vol.11, No.3 (1932. 10) ,p.82(410)- 82(410)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19321000-0082

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

宋拓薛氏款識

宋の薛尚功の「歷代鐘鼎彝器款識法帖」の宋拓本と稱する殘紙が現に蘇州の費樹蔚氏の藏にある。現存何頁か、完本のどの部分かは今不明であるが、卷首に「錢唐薛尚功編次并釋音」といふ通行本にない一行があり、王澐の題字、翁方綱の題箋、阮元、翁方綱、吳榮光、張之洞等のそれ／＼長い跋がついてゐる。拓墨は黝然たる古色をたゞへてゐた。

實は去年暮春、蘇州滄浪亭なる美術學校の燕席で、姑蘇の名人所藏の書畫數十百種を偶目したが、その時何よりも第一に私の胸を打つたのが之であつた。阮元復刻の薛氏款識を初め、宣和博古圖、考古圖等、宋刊の款識といふものは、現在の通行本では咸く筆畫の起終を尖らして針のやうにしてゐる。靜嘉堂本の宋槧說文(續古逸叢書所收)中の古文なども亦今本と同様に針がある。之を見慣れてゐる私には費氏の宋拓本は實に意外であつた。之には針がない。適に金文らしい穩かなものであつた。この點で、同じ宋時の著錄なる嘯堂集古錄など、朱翼鳳所藏の宋槧本(續古逸叢書)は、この費氏の薛氏款識に似て略々穩當な古文の倂を示してゐる。かうして見れば是等の諸書も最初の宋本には一般に針はなかつたのか、(針がどうして現はれたかは第二の問題である。右の宋本說文なども一應考へ合すべきものであらう。)それにかうした白字の墨拓にして、此書の表題の「法帖」の二字が更にびつたりとわかつて来る。之ある哉といふのが初めて展觀した時の私の驚きの全部であつた。その後蘇州から南京への車中で、河井荃廬先生の御話によつて、薛氏款識の宋拓本の存在を沈均初や吳大澂も言つてゐるが、現に見た人を聞かぬ爲に問題にされてゐる事や、朱謀壘本、劉世珩本等の事を伺つて、漸く私の驚きが客觀的意義を持つて來た。更に歸京後、國立中央研究院歷史語言研究所の集刊・第二本第二分(一九三〇年八月)に、北平午門城上で發見された薛氏款識の宋拓殘紙三葉についての徐中舒氏の精審な研究があるのを知つたが、其後この發表が因となつて更に十六葉の殘片を同研究所が購入し、併せて十九葉のコロタイプ本として同じ徐氏の跋文を附し本年三月印行された。徐氏の所説の内容はこゝには略すが、この研究所新獲の一本にも卷首の題字の次に錢唐薛尚功云々の一行十字があり、刻字の味から言つても確かに費氏本と同右に出づると思はれる。更に最近別の必要で披見した江蘇省立國學圖書館第三年刊(一九二九年・南京)に、范希曾氏の遺著、書目答問補正(卷一)が收載されてゐるが、その中の薛氏款識の條に「松江某氏藏宋拓石刻本猶完具、今尙無影印之者」と註されてゐるのを偶然發見した。但し著者范氏は同圖書館の館員で一九三〇年に死んだ目錄學者である。さて徐氏は嘉・道以後の著錄に見えた石本六種をあげてゐるが、全二十卷の完好は望まずとも、まだ中國の何處にか猶宋拓の殘本がないとは言へぬ。とにかく博渉の徐氏も費氏本とこの松江某氏本とに言及してゐない。之で費氏本の存在が更に大きな意義を持つ事を見出す。

費樹蔚氏は溫茂なる風格一見我徳川家達公に彷彿たる人であつた。春色闌なる滄浪亭の午後、明窓下にこの帖を披閱した時、一鑿時の後、私の指先はポケットの巻尺に觸れてゐた。同時に總べて何頁あるかを數へる事、阮刻本其他の刻本と對勘する爲に毎頁の行款の起訖を鈔出すべき事を考へてゐた。然し私の胸のときめきと、畫を讀み書を論ずる其の時の私の情趣とは遂に以上の事をなすとげしめなかつた。戒むべき情懷への溺没が、この報告の最も主要なるべき部分を缺かしたためである。勿論名人の諸跋は一つも讀まなかつた。(但しこの拓本殘紙は恐らく十餘頁もあつたらうと思つてゐる。)他日誰か費氏本を尋ねて、この金石學上の重要な資料について正しい學問的報告を學界に送つて頂きたいと願つてゐる。(壬申秋日西川寧識)